

2018 年度 ワークショップ P クラス

レポート

京都造形芸術大学とねぶた

～ねぶたにおける構築性、芸術性の考察～

学歴番号 11827041

情報デザイン学科 クロステックデザインコース

山田 宇矩

1 はじめに

ねぶた、とゆうものは日本の旧暦にあたる7月7日に行われてきた夏祭りの「かたち」である。現在では主に青森でその祭りは行われている。

さて、昔から行われてきたねぶたではあるが、実は多少の差異こそあるが、京都造形芸術大学（以下京都造形）でも同じものが行われている。なぜ、東北と縁もゆかりも無い京都の大学でねぶたが行われているのか。それを考察していこうと思う。

2 祭りとしての比較

京都造形でねぶたが行われていると先述したが厳密に言うと、それはねぶたの代名詞である山車灯籠を大学で行われる「瓜生山祭」に出す、といったものである。それを踏まえ、考察するにあたり東北地方で行われる「ねぶた」と京都造形の「瓜生山祭」の違いを知らなければならぬだろう。

まず東北で行われている「ねぶた」だが、その起源は七夕、お盆などの様々なものから影響を受けて出来上がったものと考えられている。祭りとしては大勢の人が掛け声と共に街の中山車灯籠を引き、練り歩くとゆう大変激しいものとなっている。

そして京都造形の「瓜生山祭」だが、「ねぶた」ほどの歴史はない。しかし、学生たちが中心となって出店や催しを、そして大学も積極的に広告を出していることもあって活気に溢れるものとなっている。

さて、祭りについてだが、先に述べた出店と催し、そしてねぶたが主なものとなっている。こちらでも山車灯籠を使ったものであるが本場の「ねぶた」と違い建築物、オブジェとしての側面が強く、多彩な色を使う訳でもなく、また、動かせる訳でも無い。しかし、それらの要素とは違う特色がある。

3 京都造形芸術大学の「ねぶた」

大まかに二つの要素に分けられるが、まず一つ目の要素は多くの種類があることである。芸術の大学であるからか、生徒たちによって作られる作品はどれも多種多様で個性的なものばかりである。もちろん東北の「ねぶた」も多くの種類があるが、あくまでも既存の枠組みの中に位置するものであり、個性的、多様なものとは少々言い難いものである。つまるところこの違い「伝統」か「創造」。どちらを重視しているかの話であるだろう。

二つ目は形としてのディテールである。京都造形の山車灯籠は色を用いない。そのため模様、顔の表情を表現するためには別の方法を使うしかないのである。紙を重ねる等の表現もあるが、一際印象的なのは凹凸による

表現であるだろう。これにより陰影が深まり、近代的で神秘的な趣きを感じられる。また、モチーフとした物を自然な表現で表すことができるのも良い点である。

4 結論

なぜ京都造形でねぶたが行われるのか。造形のし易さや素材の種類が多くなく、また、それらを扱う際にそこまで専門的な技が必要ではない、などの理由が考えられるがここまで考察してきた方面から見ると、「長く歴史がある物、事に対する異なるアプローチの仕方、視線を養う、また既存のものに捉われない発想をつける」ものであると私は考える。

芸術大学で学ぶことは古典的なものであり、反面常に先進的なものであると私は考えている。その点ねぶたは歴史的なものとしてリスペクトでき、かつ創造性の「余白」を残した、格好の教材であったと考えられる。そして「瓜生山祭」で発表する物であるため、ゴールと一定のラインが存在し、達成感や「より良い物を作る」精神、つまり探求の精神を学べるものであることも良い点だろう。

結論として、見世物の面ではなく大学側からとしてはニーズが有り余るほどあったため京都造形でねぶたが行われるようになったと考えられる。